北陸大学　紀要
第28号（2004）
pp. 131～144

筑波大学附属図書館所蔵本『水滸後伝』の「識語」について

村　田　和　弘 *

Study on the “Afterword” in the texts of “Shuifuhouzhuan” in Tsukuba university library collections.

Kazuhiro Murata *

Received October 5, 2004

Abstract

Tsukuba university library have one texts of “Shuifuhouzhuan”. That is one of the rarest original texts in the world of “Shuifuhouzhuan”. There is an “Afterword” which is written by Koishi Genzui. By reserching this “Afterword”, It became possible to make connections between the texts of “Shuifuhouzhuan” that are kept in different places. Forthermore, it is possible to discover the extant of circulation of “Shuifuhouzhuan” during the later Edo Period. For example, this texts tells us that Takizawa Bakin that the famous novelist in the later Edo Period read same texts. In this way, the texts concretely demonstrates that people in the later Edo Period how come into contact with Chinese vernacular stories.

０．序論
１．筑波本の版本と「識語」について
２．殿村篠斎と滝沢馬琴
３．山脇家と小石元瑞
４．結論

０．序論

明代の白話長篇小説『水滸伝』はいうまでもなく四大奇書の一つであるが，他の小説同様に，『水滸伝』にもいくつか続書がつくられた。いまかりに大塚秀高氏の『増補中国通俗小説書目』に拠れば，主だった続書にはつぎの四種が挙げられる[(1)]。

＊未来創造学部
School of Future Learning

a　水滸後伝　八巻四十回　陳忱著　九行二十字　康熙三年（1664）刊
b　蔡元放評水滸後伝　十巻四十回　改修本　九行二十五字　乾隆三十五年（1770）序刊
c　後水滸全伝　不分巻四十五回　清蓮室主人　清初刊
d　蕩寇志《結水滸全伝》　七十巻七十回附結子一回　兪万春　咸豊元年（1851）刊

この四種のうち，bはaの改修本であるが，文章が大幅に書き換えられているので別種の書物とした。各種ともにそれぞれ多くの異なる版本が刊行されているが，ここではそれら版本を網羅的に整理することが目的ではないので，これ以上は立ち入らない。『水滸伝』の結末を不満とする読者が，金聖嘆による「腰斬」はもとより，それぞれに続書を著し，その続書がさらに異なるエディションをはらみつつ伝播し広く読まれたことを確認すればよいであろう。このなかで本稿が取りあげるのはaすなわち陳忱による『水滸後伝』（陳本）と，bすなわち蔡元放による改修本『水滸後伝』（蔡本）である。この二種の書物の，日本の江戸後期における伝播と受容の問題について，滝沢馬琴との関連に焦点をあてて述べてみたい。

江戸後期における『水滸伝』ブームとその立役者である滝沢馬琴についてはすでに詳細な研究がなされており[(2)]付け加えるべきものはないが，実は馬琴が『水滸後伝』の入手にも異常な執着を示していたことについて言及されることは少ない。馬琴と『水滸後伝』との関係で言えば，従来は馬琴の書き入れのある蔡本一部（天理図書館蔵）だけがクローズアップされていたが，しかしでは馬琴がいったいどのようなテキストを参照して書き入れを行ったのかについては，従来知られていなかった。ところが最近になって，筑波大学附属図書館所蔵本『水滸後伝』（筑波本）にも馬琴の書き入れがあることが報告され，いわば馬琴と『水滸後伝』を結ぶ重要なテキストであると考えられている[(3)]。結論を先に言えば筆者も同意見であり，あらたな見解はないのだが，本稿はさらにこのことを筑波本の巻末に録された「識語」を通して考察したい。従来の先行研究の中に筑波本を置き直して江戸後期における『水滸後伝』をめぐる流通状況を再整理することを第一の目的とし，さらに続書中もっとも早く成立した『水滸後伝』がいかなる形で伝播し，人々がそれをどう読んだかという，読書をめぐるプラチックな問題についても考察を及ぼしたい。したがって物語内容そのものについては本稿のテーマからははずれることとなる。

1．筑波本の版本と「識語」について

まず筑波本についての書誌的事項を見ておこう。『筑波大学開学30周年（創基131年）記念附属図書館貴重図書　特別展』二七『水滸後伝』の解説に拠りつつまとめるとつぎのようになる[(4)]。

八巻四十回　十六冊　万暦三十六年（1608）序刊　左右双辺　無界　半葉九行二十字
目録題・内題次行に「古宋遺民著　鴈宕山樵評」の署名

「鴈宕山樵」とは陳忱の号である。陳忱の生涯については先学の究明するところであり贅言を要しない。この序の「万暦三十六年」という記述についても，物語に鄭成功が抗清復明のた

めに台湾を占拠したことが反映されており，鄭成功は1661年に急死していることなどから，これが仮託であり，「古宋遺民」というのも著者陳忱の明朝の遺民として生きる心情を寄託した署名であることも，つとに先学の指摘するところである[(5)]。

英国博物院には陳本の原刊本が蔵されており，それには封面が残っている。その封面には康熙三年（1664）と刻されており，これが実際の刊行年を伝えている[(6)]。またその封面には「遺経堂蔵書」の陽刻印が捺されている。大塚秀明氏の報告によれば，筑波本にもなぜか書中にしかもさかさまに「遺経号」の陽刻印が計三箇所捺されているという。さらに原刊の重刻本[(7)]とは批語の場所が異なり，また原刊重刻本に見られる巻末の「紹裕堂新刻水滸後伝八巻終」の文字が筑波本にはないことから，筑波本が重刻本ではなく原刊本に近い版本と考えられるという大塚秀明氏の論証はうなづける。つまり筑波本が世界でも数少ない陳本原刊本系統の版本であると考えて差し支えないであろう[(8)]。日本では早稲田大学図書館や東京大学文学部に原刊本系統の版本の所蔵されていることが知られている[(9)]。ただ早稲田大学図書館所蔵本は十冊仕立てであり[(10)]，筑波本の十六冊仕立ては本来の姿ではないであろう。なお蔡本も巻数は違うがやはり十冊仕立てである。「十冊」という記述からでは陳本か蔡本か区別はつかないことに注意が必要である。

ところで陳本の原刊本には巻首に「宋遺民原序」，「鴈宕山樵序」，樵余偶識の「論略」が付されていた。筑波本には補写された個所があるのだが，「宋遺民原序」「論略」は全文が補写によるものであり，そのほかにも第四回第一葉，第三十三回第六葉，第三十六回第十六葉，第四十回第一葉がやはり補写されているという[(11)]。つまり筑波本は陳本原刊本系統の版本ではあるが状態が悪く，誰かが補写により善本に近づけようとしたものであることがわかる。それが誰かといえば，「識語」を書いた人物にほかならない。

「識語」のことに入る前に，蔡本についても確認しておこう。「古宋遺民鴈宕山樵編輯，金陵憨客野雲主人評訂」と銘打ち，乾隆三十五年（1770）の「蔡元放序」および「読法」が付されている。蔡元放の名は㬎である。「金陵憨客野雲主人」というのも蔡元放のことであろう。自分を評者にするために陳本の評者「鴈宕山樵」を著者「古宋遺民」とくっつけてあたかも一人のように見せかけている。このからくりは陳本と蔡本を見比べれば容易にわかることなのだが，版本流通の稀な江戸後期に滝沢馬琴がすでにこのことに正確ではないが気付いていたことは後でふれよう。

さて筑波本巻八末には「識語」が書き込まれている。「文政十一年（1828），秋嵒（同岩，筆者注以下略）僊（同仙）史竜題」と署し，陰刻で「竜印」陽刻で「元瑞」の二印が捺されている。秋岩仙史という人物は，小石元瑞であると考えられている。以下に略歴を記すと，小石元瑞，名は竜，樫園・秋岩と号し，京都の蘭方医であった。皆川淇園等について経書を学び漢籍に通暁した。嘉永二年没（1849），66歳であった[(12)]。名号が一致し，年代も齟齬しないため，従来から補写者を小石元瑞としてきた。おそらくそう断言して間違いないと筆者も考えるが，京都の蘭方医と『水滸後伝』の補写とのつながりが説明されなくては充分だとはいえないだろう。またこの書物に馬琴の書き入れが存在する以上，なぜ存在するのかが確認されなくては，補写者イコール小石元瑞であると最終的には断定できないはずである。

それを知るためにまず「識語」を読むことにしよう。おそらくこれまでこの「識語」の全文が紹介されたことはないであろうから，ここに全文の読み下し文と現代語訳を載せる。便宜上

句読を施し段落に分けたが，もちろんすべて筆者によるものである[13]。

【一】水滸百二十回，人口に膾炙すること久し矣。又後伝なる者四十回有り。何人の著す所か知らず。松坂の殿村篠斎翁，新たに之を購ひ獲たり。余，其の書を借覧せしに，摩滅欠缺多し。翁，因りて余に校補を託す。聞くに，山脇東海先生，一善本を蔵す。即ち乞ひ借りて讐対す。余，冗務嘈劇，周年にして始めて竣功す。
（『水滸伝』百二十回が人口に膾炙して久しい。また『水滸後伝』四十回があるが，誰の著作であるかはわからない。伊勢松坂の殿村篠斎翁が，最近その『水滸後伝』を手に入れた。私がその書を借覧したところ，文字の摩滅や欠葉が多かった。篠斎翁はそこで私に校勘して補写するよう依頼してきた。聞くところによると，山脇東海先生が善本を所蔵されているという。そこでお願いして借りてきて両者をつきあわせて校勘を行った。煩雑な私事に追われたために，一年ほどかかってようやく終えることができた。）

【二】嘗て拍案し歎じて曰く，嗚呼，快書なり，快筆なり，と。已に冷めたるの死灰を吹き起こし，而して未だ有らざるの奇文を生み出だす。前編不平の事を尽了し，読む者をして快を呼（さけ）ばしむ。真に才子の筆なり。
（読了後，おもわず机をたたいて「ああ，実におもしろい書であり，おもしろい文章だ」と感じ入った。すでに決着のついた物語を取り上げて，これまでなかったような素晴らしい文章を生み出している。前編に残っていた不平をことごとく正し，読者に快哉を叫ばせる。まことに才子の文章である。）

【三】蓋し前七十回は仮を把りて真を装ひ，真仮の間に遊戯す。後五十回は仮を認めて真と為し，毫も遊戯の態無し。此の書に至り，則ち真仮の間を脱却す。乃ち遊戯中の遊戯者なり。而して其の人の意を快からしめること是の如し。
（思うに，水滸伝の前七十回は仮（虚構）を用いて真（真実）を語り（／騙り），真仮の間に遊戯する面白さがあったが，後五十回は仮（虚構）を真（真実）とみなしてしまい，少しも遊戯する面白さがない。この書にいたっては，真仮の間をするりと脱け出しており，まさしく遊戯の中の遊戯する者となっている。そうであるからこのように読む者の気持ちを快くさせるのであろう。）

【四】抑そも百八人，皆，賊なり。而れども義挙に似たる者有れば，則ち是が為に肉飛眉舞し，冤屈に似たる者有れば，則ち是が為に歯切腕攘す。今，吾輩，実に其の人生有りて，又，賊を為さず。若し少義微屈有れば，則ち其の人を動かすこと応に彼より百倍なるべし。而して半生為す所，蠢蠢として何事ぞ。未だ知らず，蓋棺後，能く人を動かす者有るやを。能く此の為に歉然とせざることあたわざるなり。
（そもそも水滸伝の百八人はみな盗賊である。であるが義による行いを見れば彼らはそのために身命を惜しまず活躍し，冤罪による不平があれば彼らはそのために切歯扼腕する。ひるがえって私たちは今，この世に生を受けて盗賊にもなっていない。だからもしわずかでも義による行いや鬱屈があれば，まさに彼らより百倍も，人の心を動かすであろう。だが私の半生で行っ

てきたことといえば，愚かしくも何事をなしたというだろう。棺の蓋を閉じた後，いったい人の心を動かすことができるであろうか。そう考えると，あきたらない思いを抱かざるをえない。）

【五】翁，亦た余と小説の嗜を同じくす。巻を掩ふ毎に，未だ必ずしも此の歎無からざるなり。返すに臨み巻末に録して之を問はん。
文政戊子春尽日　秋岩仙史竜題
（篠斎翁も私と同じく小説の嗜好を持つ。私は巻を置くたびにこの嘆かわしさを感じないわけにいかない。書を返すにあたり巻末にこの文をしたため，篠斎翁に聞いてみたい。
文政十一年春尽日　秋岩仙史竜題す。）

この「識語」からは次の点が判明する。【一】で述べられているように，この書物は文字の摩滅や欠葉が多く，そのため校勘補訂を施す必要性があった。この点は現在の版本の状況と一致する。そして重要な情報として，もとの持ち主が伊勢松坂の殿村篠斎であることが明かされている。この殿村篠斎が馬琴と『水滸後伝』を結びつける決定的な役割を果たすが，それについては後述する。補写の成立を整理すれば，篠斎が補写者に校勘補訂を依頼し，補写者は山脇東海という人物から善本をかりて校勘を行い，その作業に１年ほどかかったことがわかる。そして【五】から，この「識語」が，補写者が殿村篠斎へ書物を返却するときに本人により書き込まれたものであることがわかる。したがって自筆書き込みの「識語」を有する筑波本がこの殿村篠斎所蔵本そのものであると考えられるのである。当時『水滸後伝』の善本は稀見であった。篠斎がたまたま『水滸後伝』を購入し，補写者はたまたま善本の所蔵者である山脇東海と関係があったので，結果的に当時において唯一，校勘作業を行い得る立場にいたのである。時として偶然が大きな役割を果たすが，筑波本もこのような偶然により産み出されたものだといえる。なお山脇東海の所蔵していた善本の所在は不明である。以上の関係を図式化すれば，つぎのようになる。

殿村篠斎所蔵本　→　補写者　←　山脇東海所蔵本
（筑波本）　　小石元瑞？　　（所在不明）

ところで「識語」の【二】【三】【四】からは当時，『水滸後伝』がどう読まれたかを知ることができる。【二】では「快」や「奇」，「才子」といった明末の小説批評タームを駆使し，【三】では「真／仮」の批評概念に踏み込んでいる。もちろん百二十回本『水滸伝』を前半七十回と後半五十回にわけるあたりは金聖嘆を学んだのであろう。「才子の筆」というのも「第五才子書」と同工である。だが前半七十回を「仮」が「真」を「装う」語り＝騙りになっている点に評価のポイントを置き，後半五十回がこの「語り＝騙り」性を喪失しているから面白くないというあたりは独自性が見られる。さらにこの『水滸後伝』が「真／仮」からも「脱却」する「遊戯」性を持っていること，すなわち虚構であることを楽しむところを肯定的に捉える議論は，文人的史論にとらわれない江戸の読者ならではであろう。それだけに【四】で単純に登場人物の人生と読者である自分自身の人生とを比較してしまうところは明清の文人には考えられない発想である。いずれにせよこの「識語」は補写者がかなりの読み巧者であったことを示す

とともに，日本での受容の成熟さをも窺わせる貴重な資料である。

つぎに，筑波本『水滸後伝』を所有していた殿村篠斎に焦点をあてて『水滸後伝』の流布状況について見ていくこととする。

2．殿村篠斎と滝沢馬琴

日本にもっともはやく『水滸後伝』が渡ってきたのはいつかははっきりしないが，『舶載書目』によると元禄十六年（1703）に一部もたらされているのがいまのところもっともはやい記録である[14]。そのときの版本は，年代からいって当然陳本であるが，八本四十回，古宋遺民著，雁宕山樵評，自序，雁宕山樵序，目録，論略が備わっていたという記録からみて，原刊本系統の版本がもたらされたと考えられる。康熙三年の刊刻から元禄十六年の日本への舶載まで39年のタイムラグがあったことになる。この間隔はけっして素早く渡来したとはいえない。明版コレクションとして名高い尾張徳川家の蔵書（現在の蓬左文庫）には，出版後６－10年後にもたらされた例があるという[15]。詩文叢書といった教養必読書ではなく，白話通俗小説のしかも続書としてはこの程度なのかもしれない。その後『水滸後伝』の日本での消息はしばらく途絶える。そして，つぎに『水滸後伝』の状況に言及したのが，ほかならぬ滝沢馬琴であった。

馬琴は享和二年（1802）に京阪地方へ旅行に出かけ，旅行記『羇旅漫録』を著した。そこに馬琴が途上の名古屋で『水滸後伝』に出会ったことが記されている。

「又名古屋広小路秤座守随の蔵書に水滸後伝10巻あり。主人をしみて人に見せず。予柳下亭に就てその目録をうつしたり。水滸後伝　古宋遺民雁宕山樵編輯　金陵憨客野雲主人評定（－略－）この書倉卒にしてこれをよめり。故にその目録を抄出して後勘に備ふ。水滸後伝もと二本あり。共に今世にまれなり。」[16]

これによるとこのとき馬琴が見た版本は十巻四十回の蔡本であった。それでも世に稀な書物とされている。蔡本の乾隆三十五年の刊刻から馬琴の目睹までの間隔は32年である。やはり江戸後期において，マイナーな通俗小説が人々の目に入るまでのタイムラグは30年ほどなのであろうか。ところで馬琴は「二本」というが，この時点で陳本と蔡本の区別がついていたわけではない。ここでは天花翁の『結水滸全伝』と『水滸後伝』との二種の書物を指している。

ところで『羇旅漫録』のこの条の頭注には追書が付されており，馬琴のその後の『水滸後伝』との関わりを伝えている。

「伊勢松坂の友人殿村佐五平，近ごろ京師にて水滸後伝を購得たりといふ。享和中予尾張名古屋の客舎にて，一閲せしかども，倉卒の際にして多く忘れたり。よりて借覧せまほしきよしいひつかはしければ，うけひて郵附し庚寅三月廿一日右の書全四十回十冊島屋よりとどけ来る。佐五平は篠斎と号す，松坂の豪富にて，本居宣長の門人，和歌を嗜み又和漢の稗史を好む。百十里外に在て書を貸す友は多く得がたし。大阪の国瑞の話に，予崎陽にありし日，水滸後伝を得たり。そのころは小説にこころなかりければ，価廿目ばかりにかへて人にやりぬ。今おもへばをしむに堪たりといへり。大阪逗留中，書肆に水滸後伝のことをきくに，その名をだにしら

ぬ書肆多し。江戸にてもたへてこの書をみることなし。水滸後伝二本あり。一本は四才子伝の評をせし天花翁の作なりといふ。予いまだこれを見ず。」(17)

さきに馬琴には陳本と蔡本の区別がついていないといったが，この追書の時点でも両者の区別はついていない。重要な点は，伊勢松坂の殿村篠斎が京阪で『水滸後伝』を手に入れたことを馬琴が知り，借書を申し込んだことである。『水滸後伝』は江戸では書肆でさえ知らないものが多く，まったく見ることのできない書物であった。このとき篠斎が手に入れたものがすなわち筑波本である。

殿村篠斎という人物は，ごく限られた友人知己としか交際しなかった馬琴にとって無二の理解者といってよかった。馬琴の追書にあるように，篠斎の家は松坂の木綿問屋で江戸店を持つ富豪であった。本人は安永八年（1779）の生まれであるから馬琴より12歳年下である。本姓は大神氏，初名は助吉，また輔吉とも。家業を継いで佐五平と称し，名を安守と改める。号は篠斎のほか篠舎，三枝園，蝙蝠磨，嬬磨などがある。16歳で本居宣長に学ぶなど学問や和歌をよくした。馬琴とは，馬琴の京阪旅行までには知り合っていたらしく，このたびの旅行の訪問者リストともいうべき『滝沢家往来人名簿』のなかにその名を列ねている。松坂には帰途に伊勢神宮参詣のおりに1泊しているが面会はしなかった。二人が始めて顔を合わせたのは文化四年（1804）四月二十一日，篠斎が馬琴を訪れたときのようである。文化十四年（1817）には馬琴の『南総里見八犬伝』第一回から第二十回までおよび『朝夷巡島記』第一条から第二十条までに対する批評本『犬夷評判記』を著し，その校訂には妻の弟，櫟亭琴魚があたった。この戯号の「琴」字は当然馬琴から１文字もらったものであり，馬琴がそれを許したということがなによりも二人の交友の親密さを物語っている。さらに馬琴はこの評判記に序を贈ってもいる(18)。こうした無二の理解者であったから，馬琴は遠慮なく借書を申し入れるができた。

さて篠斎本四十回十冊が馬琴の手元に届いたのは庚寅三月二十一日であった。この庚寅は文政十三年（天保元年，1830）である。つまり馬琴は初見から数えて28年後にようやく『水滸後伝』を手元に置いて読む機会を得たのであった。文化二年（1805）の『水滸画伝』初編には「校定原本」と称して馬琴の判断で『水滸伝』テキストの整理を行っている。それは「李卓吾評閲一百回，金聖歎外書七十回，卓吾評点一百一十五回，水滸後伝四十回（二本あり，今四十回本これを取る）」というものだが，この時点では『水滸後伝』に関しては京阪旅行時の目録の写しと内容メモ程度しか手元になかったことがわかる。同じ文化二年十一月には，プロットの一部を『水滸後伝』の翻案に拠ったといわれる(19)『椿説弓張月』の執筆が開始され，文化四年（1807）正月に刊行，文化八年（1811）三月には，前後五篇二十九冊が完結している。これらはすべて名古屋での手控えをもとに書かれており，それだけに馬琴の『水滸後伝』に対する執着が窺える。

ところでこの四十回十冊が陳本か蔡本かはっきりとは書かれていない。このときの馬琴には区別がついていなかったのだから当然といえば当然であるが，そしてむろん筑波本に馬琴の手書きの書き込みが存在するのであるから陳本であるが，そのことを馬琴自身の言葉から確認しなければならない。『水滸後伝』の借書については，馬琴の殿村篠斎宛の書簡にも記述があるので，それを日付順に整理して見てみよう。

〔A〕文政十年（1827）三月二日[20]

去秋大阪にて水滸後伝御手ニ入候よし，右之本ハ虫入ニテ欠も両三巻有之候処，幸ひ云云ニて欠本の処かき入レ御補ハセ可被成候よし。右後伝ハ野生むかし尾張にて一寸披閲いたし，天花翁作之方のよし委曲被仰下，珎重御同慶仕候。後伝今は世に稀ニ候処，御手ニ入候段何より之御義奉存候。よき御人に御ちなミ，早速御繕写も御出来の御様子，たのもしく奉存候。（－中略－）後伝共ニ渇望仕候。（－中略－）後伝共ニ恩借奉願候。後伝も廿四五年前，旅宿ニテ甚せわしく被閲いたし候へバ，多く忘れ申候。何分拝見いたし度物ニ御座候

〔B〕文政十年（1827）十一月二十三日[21]

水滸後伝破裂之処御繕ひ被成候由珍重奉存候昔年名古屋にてせはしく一覧久しき事故わすれ候この義はいつ也とも恩借奉希候也

〔C〕天保元年（1830）正月二十八日[22]

水滸後伝ハいかがこれも御覧済次第借覧いたし度奉願候

〔D〕天保二年（1831）四月十四日[23]

直に水滸後伝校訂に取りかかり候新本は以の外の悪本にて原本を以てよく校訂いたし不申候てはよめぬ処多く御座候間やうやう一日に三四十丁ならでは校しがたくよほどいとまをつひやしこれも当月上旬迄に校し果候原本久しく御かし被下候故かやうのなぐさみも出来候て老拙所蔵の新本は外に類なき上本と成候返返も御恩恵と感荷仕候校訂しをはり候へば原本早速返上仕度被存候へ共（－中略－）その間に後伝新本の評を写させこれを一処に上ヶ可申と存候処（－中略－）忘れぬ内に水滸後伝の愚評をつづりて原本返上の節御目にかけんと存候て新本校訂後愚評草稿に取かかり候最初は手みじかに書果んと致候処例の癖にて思ひの外長く成り十一行よみ本程の字数にて五十丁斗にも成可申候へ共いまだ稿し果不申候

〔E〕天保二年（1831）四月二十六日[24]

先御礼申上候御珍蔵旧版水滸後伝久々恩借荷恩恵候趣ハかねて申上候如く右原本者去秋中購求候重訂本校讐三月下旬（－中略－）誤字多御座候ニ付やうやく一日ニ三十余丁四十丁位ならては校しかね候様に相成り候半月許のいとまを費しやうやく四月六日ニ稿し畢り候御蔭ニて拙蔵本よめ候様相成リ御恩恵長く致感荷候事ニ御座候則今便右原本水滸後伝十冊返上仕候着之砌御落掌可被成下候これらの御厚義別ニ謝義無之候間忘れぬ内と存右後伝拙評を綴り備御笑候（－中略－）

返上

一　水滸後伝十冊

貸進

一　水滸後伝国字評稿本（－中略－）

貴蔵水滸後伝破裂の分うつし足しの処誤写其外共磨滅直し行ととき かね読め不申候処補写いたし置申候是も長々恩借之御礼心ニ御座候左様御承知可被成下候

これらの記述からつぎのことがわかる。まず〔A〕から，殿村篠斎が『水滸後伝』を入手したのは文政九年（1826）秋，大阪であったこと，そして虫食い欠葉のある欠本であったものを補写したことである。補写について，ここでは「云々ニて」としか書かれていないが，当事者同士ですでに了解されていたことなので省略したのであろう。注意すべき点は，篠斎が入手し

た書物が，馬琴が名古屋で一瞥した書物とは別物だと篠斎から言われたことである。篠斎には馬琴のいう『水滸後伝』とは違う『水滸後伝』を入手したということが解った。とはいえ篠斎も天花翁との区別がやはりついていなかったのであるが。ともかくこのことから間接的に篠斎所蔵本の十冊は蔡本系統ではなく陳本系統の版本だと知られる。馬琴は篠斎から指摘されてその『水滸後伝』をどうしても見たくなり借書を申し込んだのであった。そして〔B〕〔C〕のようにその後，何度も催促の手紙を出している。実際は「識語」にあるように，篠斎の本は補写の依頼先に1年以上置かれており，返還されたのが文政十一年なのだから，貸すこともできなかったわけであるが。

ところが〔D〕の天保二年（1831）四月十四日になると，馬琴は，篠斎から借りた書物を「原本」と呼び，自身の蔵する書物を「新本」と呼び，両者の校勘作業を行い，四月上旬には作業を終えている。〔C〕の天保元年（1830）正月二十八日の時点ではまだ書物を催促していることから，先述の篠斎から届けられた日付庚寅三月二十一日が〔D〕の天保辛卯二年の前年，天保庚寅元年の三月二十一日であることがわかる。馬琴の入手した「新本」は「もってのほかの悪本」で「原本」がなければ読めないほどであった。そして校勘後は『水滸後伝』の評に取りかかりまだ稿を終えていないという。では馬琴はいつ「新本」を手に入れ，それがどの版本なのか。〔E〕の天保二年（1831）四月二十六日には「去秋」すなわち天保元年の秋に「重訂本」を購入したと書かれている。「重訂本」とはいうまでもなく蔡本を指す。つまり天保元年三月二十一日に篠斎から補写の終わった陳本が届き，同年秋に自分で蔡本を購入し，そこで馬琴の目前に二種が揃ったのである。その後天保二年四月六日に両者の校勘を終え，二十六日に返却となった。返却にさいして馬琴は謝意として『水滸後伝』の批評本『水滸後伝国字評』を贈っている。馬琴の『水滸後伝』への執着はこれで終りを告げ，以後，言及されることはない。

馬琴が書いた批評本は『半閑窓談　水滸後伝国字評』として現在まで残っている。その天保二年四月七日の日付のある序文には，馬琴が『水滸後伝』を入手した経緯が書かれている。

「己丑のとし水滸後伝舶来しつ去年む月のなかはに至りてここにも芝なる尚古堂にその書ありと聞えしかハとく購得はやとて人もて求めにつかハせしにみな売果てなしといひしを浪速の書肆よりよひとらしてふミ月なかはに購得たれハ価もいたくのほりにけりやかて繙きて閲せしにその書ハ清の乾隆のとし三十五年蔡寡といふものの再評翻刻しつるにて誤写謬刻多くあり無下の悪本なりけれとも幸ひにしてささの屋ぬしのかされし原本あるをもて校訂せまく思ふものから例の著述にいとなくて得はたささりけるをことし弥生の下旬よりしはらく著書の筆をととめて夜も日も校訂点裁しつつ卯月六日に校し果にき」(25)

己丑は文政十二年（1829）である。この年『水滸後伝』がもたらされた。翌天保元年正月に江戸，芝の尚古堂という書肆にあるという情報を得て買いに行かせたが，全て売り切れてしまっていた。ところが大阪の書肆が所有しているという情報を得て，七月に高値で購入したのであった。手に入れてみて馬琴ははじめて乾隆三十五年蔡寡（元放）評改修本の存在を認識し，結果的に篠斎所蔵本が同じ『水滸後伝』ながら蔡本ではない，より原刊本に近い版本であることに気付いたのであった。

このとき校勘を書き入れた馬琴所蔵の蔡本はいま天理図書館に蔵され，その書影が二枚，公

にされている。そこにはつぎの二条の馬琴自筆の書き込みがある[26]。

〔F〕第一巻第四回末
是書為筆工剛人謬，是故不可得而読者多有，因以殿村安守所蔵原本先校讐，第一巻纔施雌黄了，如余巻，異日得閒亦当校訂焉，時文政十三年陽月之吉，著作堂主人灯火識。
〔G〕「読法」末
著作堂主人云，原本八巻，蔡昇釐為十巻，明万暦戊申秋杪，雁宕山樵自序並古宋遺民偽序有之，蔡昇重刻時，削去旧序二編而附載自己序文，是故使原本開鐫歳月泯滅不伝，此可憾也。
又按，原本毎巻録署古宋遺民著，雁宕山樵評如左，蔡昇以二名為一名，所云古宋遺民者偽称也，然那山樵明万暦末人，去宋不近也，昇□是以為一名，豈有是理，可笑。

〔F〕からは文字の誤刻が多く，善本と校勘しないと読めない版本であったこと，また校勘作業が文政十三年十月には第一巻を終えながら余巻は後日に期したことがわかる。〔G〕で篠斎本を「原本」と呼ぶことは〔D〕と同様だが，すでにこの時点では蔡本が「重訂本」で，篠斎本がよりオリジナルに近い版本であることが解っていた。〔E〕で篠斎本を「旧版」と呼ぶのがその証拠である。「原本」が八巻で蔡本が十巻であるという巻数の違い，「原本」には万暦雁宕山樵自序，古宋遺民序があり，蔡本は改修のさいこの二序を削り，あらたに序を加えたことなどを正確に把握している。また「古宋遺民」が仮託で，雁宕山樵を序の「万暦」を信じて明末人であるとし，両者をつなげてしまっている蔡本はおかしいと指摘する。むろんこれは誤った説明であるが，『水滸後伝』の作者が陳忱であると論証される以前としてはやむを得ない誤りである。むしろ当時の日本人としては二種を徹底的に比較対照したのは馬琴だけであり，その理解はとびぬけていたといってよい。

ところで〔E〕に見えるように，馬琴は校勘の結果を殿村所蔵本にも書き込んでいる。実はこの点は重要で，馬琴の自筆書き入れ本が陳本と蔡本と二本，存在することが明言されているのである。つまり自分の蔡本には当然，篠斎の陳本との異同を書き入れるが，篠斎本のほうにも蔡本との異同の書き入れがなされたのである。そのことに従来あまり関心が払われてこなかった。そこで大塚論文で紹介された筑波本第四回第五葉表の書影に見える書き入れと天理本の該当個所（第四回第三十四葉表）の書き入れを比較すると，つぎのようになる[27]。

〔筑波本〕
是條，蔡元放重訂本云「做公的把杜興衣服剥下，幸喜，杜興来時，恐有差訛，原要約了，楽和到下処，去交付，因此書信，不曽帯在身辺，故此不曽捜出，府尹（見）果然没有書信，只叫扯下着実打，云云」此下文与旧本同，著作堂校閲。
〔天理本〕
此條，原本作「做公的把杜興衣服（剥下），従順袋裏捜出書信并三十両銀子，呈上拆開，看了大意，虧得書信上，孫立不落姓名，笑道，分明是一党了，扯下着実打，云云」以下与下文同。

筑波本で引用されている「重訂本」の一文は天理本の本文と一致し（一文字書き落としが見られる），天理本で引用される「原本」の一文は筑波本の本文と一致する（二文字書き落とし

が見られる)。このように相互に校勘を書き込む作業は馬琴の執念さえ感じさせる。また天理本のほうは自分の書物であるから書き込みにいちいち署名する必要はないが，筑波本のほうに「著作堂校閲」という署名があるのも，篠斎に返却する書物であるからその必要があったと考えれば何ら矛盾がない。そして「旧本」という呼び方が「重訂本」とペアをなして使われているのは，それが改訂される前の「原本」＝原刊本に近い版本であると認識したからであることは，もはやいうまでもない。

以上のことを踏まえてもう一度，書物の関係を図式化すると，つぎのようになる。

滝沢馬琴所蔵本	←	殿村篠斎所蔵本	→	補写者	←	山脇東海所蔵本
（天理本）		（筑波本）		小石元瑞？		（所在不明）
蔡本劣悪本		陳本欠本				陳本善本

このように篠斎所蔵本が中心となって江戸後期の『水滸後伝』各版本が関連付けられていることがわかる。したがってその版本が筑波本であると同定されることの重要性は非常に大きいといえるだろう。そう断言する前に残る問題は，補写者が本当に小石元瑞であるかという点だけである。

3．山脇家と小石元瑞

前述の『半閑窓談』序文には，実はつぎのような一文がある。

「京の儒生山脇翁の蔵弆に善本ありと聞えしかバ，医生秋嵒ぬしを介したてて借得て校讐補写せしめ，ひとひら毎にうらをうたせてふるき唐紙の脆きを修復し，さらに製本せられしかバ，遂に全書となりしとぞ」[28]

京都の「儒生山脇翁」のところに善本が蔵されていると聞き，「医生秋岩」を介して借り受け校勘補写した，そのさい紙が脆くなっていたので一葉ごとに唐紙で裏打ちして装丁しなおしたことがわかる。ただし篠斎から馬琴へ送られてきたときも十冊であったので，冊数の仕立ては装丁前と変更はなかった。ともかくこの「儒生山脇翁」と「医生秋岩」の関係が，「識語」にいう山脇東海と小石元瑞の関係に同定されれば，補写者が小石元瑞であり，「識語」のある筑波本が『半閑窓談』序文で馬琴のいう殿村篠斎本だと断定することができる。

そこで京都の蘭方医，小石元瑞の経歴に山脇家が関係してくるかどうかがポイントである。小石元瑞は天明四年（1784）十一月二十日，小石元俊の長男として生まれた[29]。父業をつぎ，京都の名医として知られるとともに，頼山陽，田能村竹田，広瀬淡窓，箕作阮甫，新宮涼庭ら詩人墨客，名医と交わり，風雅の道にも通じた。著書には『博采録』『東西医説析義』『梅毒秘説』『薬性摘要』『蘭薬分量考』『究理堂方府』『樫園随筆』や詩文集がある。『先考大愚先生行状』は元瑞の口述による元俊の記録であるが，文化六年稿，文化十二年増補，天保二年に重訂されている。

父親の元俊は寛保三年（1743），京都山城桂村（現在の京都市右京区桂）に生まれる。名は

道，号は有素。元俊について特筆すべきは，天明三年（1783）六月二十五日に，伏見豊後橋（今の観月橋）西で死体解剖を行い，『平次郎臓図』を著したことである。理論的な漢方医学ではなく実地観察を取り入れた医術を彼はどこから学んだのであろうか。それは後述するとして，寛政十三年（享和元年，1801），釜座通夷川北に家を構え，享和二年究理堂を建築，文化五年（1808）十二月二十五日に没し，京都柴野大徳寺孤篷庵に葬られた。

元俊は長男の元瑞に幼児から淡輪元潜，永富独嘯庵に就いて学ばせたが，この二人はともに山脇東洋の門人である。後に篠崎三島，皆川淇園に儒学を学んだ。元俊没時に25歳で父業を継いだ。文政十二年の究理堂当主としての誡諭が現存する。ちなみに元瑞の次男が小石中蔵で，文化十四年（1817）生れ，明治二十七年（1894）没。中蔵の次男が小石第二郎，その長男が小石暢太郎，その三男が小石秀夫（大阪市大名誉教授）である。

ところで元瑞の童時の二人の教師を門人とした山脇東洋とはいかなる人物か。山脇東洋，名は尚徳，字は玄飛，通称は道作。宝永二年（1705），京都に生まれる。21歳の時，請われて山崎玄脩の養子となる。享保十四年（1729），25歳で法眼に叙せられ，養寿院と号す。そして宝暦四年（1754），京都六角獄舎において日本ではじめて刑屍体を解剖（「観臓」）し，実見記録『臓志』を著した（1759）。宝暦十二年（1762）八月三日に没する。すなわち解剖という方法論を日本ではじめて実践したのがほかならぬ山脇東洋であった。その息子が山脇東門，名は玄陶，字は玄侃である。東門も明和八年（1771），江戸の前野良沢，杉田玄白らの観臓と同年に，1回目の解剖を行なって『玉砕臓図』を著し，安永四，五年にも続けて解剖を行なっている。それぞれ元俊が29歳，33歳，34歳のときであった。そして東門の息子が山脇東海で，寛政十年（1798）二月十三日，施薬院三雲環善と東海の解剖のさいには，元俊が都督として臨んでおり，同年十月『施薬院解男体臓図』序文を元俊が題している。つまり元俊は解剖という方法論を山脇東門および東海に学んだのであった。さらに『施薬院解男体臓図』末尾の観臓人員には元瑞の名も見えており，元瑞も執刀したことがわかる。時に元瑞15歳であった。すなわち元瑞も解剖観察医術を東海に学んでいたのである。このように小石家と山脇家とは代々の師弟関係を築いていた。とすれば「識語」に見える山脇東海はまさに小石元瑞の師筋にあたる人物と断定することができる。小石元瑞が山脇東海に借書を申し込むのは容易であったろうと推測される。

4．結論

以上の考察から判明する点をまとめると，次のようになる。

1）筑波大学附属図書館に所蔵される『水滸後伝』の補写者および「識語」の題識者は小石元瑞と断定することができること。

2）『半閑窓談』の序文に見られる「山脇翁」は京都の山脇東海，「秋岩」は山脇家所蔵本との校勘をおこない筑波本を補写した小石元瑞と断定することができること。

3）筑波本はきわめて稀な陳本系統の版本であること。

4）筑波本は殿村篠斎所蔵本であり，滝沢馬琴の閲覧に供された書物であること。

5）筑波本にも馬琴の書き入れが残されており，馬琴所蔵の天理本との比較照合により馬琴の具体的な作業が判明すること。

山脇家の善本が行方知れずなのが残念であるが，とりあえずはこのように結論づけることができるだろう。先行研究に新たに付け加えることの少ない，「屋下に屋を架す」ような結論になってしまったが，先行研究のなかに筑波本を加え直して，あらためて全体を整理しなおす意味があったならば幸いである。もとより筑波本の書き込みを含めた詳細な検討は後日の課題として残されている。

追　記

本稿は2003年11月30日，大東文化大学における中国近世語学会秋季研究集会で行った口頭発表に加筆したものである。御助言をいただいた方々に感謝の意を表します。

また貴重書である版本の「識語」のコピーをお送りくださった筑波大学助教授大塚秀明先生，ならびに貴重書の所蔵者である筑波大学附属図書館にお礼を申し上げます。

参考文献

（1）　1987　汲古書院　161-164頁
（2）　代表として，高島俊男　『水滸伝と日本人』　1991　大修館書店　第十章　曲亭馬琴　165-202頁を参照。
（3）　大塚秀明　開学30周年特別企画「本学図書館所蔵の貴重書」③　殿村本『水滸後伝』：識語が伝える本書の来歴　2004　つくばねvol. 29 no. 4　3-4頁
（4）　2003　筑波大学附属図書館　11頁。この解説は大塚秀明氏により書かれたものであるが，これより早い『筑波大学和漢貴重図書目録稿－旧分類の部－』　1987　筑波大学附属図書館　110頁の解説に基づきつつ補筆訂正を加えている。
（5）　鳥居久靖　「水滸後伝」覚え書　1966　天理大学学報第48輯　39-70頁
（6）　柳存仁　『倫敦所見中国小説書目提要』　1983　書目文献出版社　170-172頁
（7）　古本小説集成の『水滸後伝』が原刊重刻の紹裕堂新刻本の影印。
（8）　注（3）大塚論文参照。
（9）　注（1）大塚書目参照。
(10)　『早稲田大学図書館所蔵漢籍分類目録』　1991　404頁
(11)　注（4）所掲『筑波大学和漢貴重図書目録稿－旧分類の部－』の解説による。
(12)　同注（11)。また，山本四郎　『小石元俊』　1967　吉川弘文館，松尾　博　小石元俊・元瑞略伝－京都の蘭学（1）－　2002　彦根論叢第337号も参照。
(13)　原文は以下の通り。句読点は筆者による。
　水滸百二十回，膾炙人口久矣。又有後伝者四十回。不知何人所著。松坂殿邨篠斎翁，新購獲之。余借覧其書，多摩滅欠缺。翁因託余校補。聞山脇東海先生蔵一善本。即乞借讐対。余冗務嘈劇，周年始竣功。嘗拍案歎曰，嗚呼，快書也，快筆也。吹起已冷之死灰，而生出未有之奇文。尽了前編不平之事，使読者呼快。真才子之筆也。蓋前七十回，把仮装真，遊戯真仮之間。後五十回，認仮為真，毫無遊戯之態。至此書，則脱却真仮之間。乃遊戯中之遊戯者也。而其快人意如是。抑百八人皆賊也。而有似義挙者，則為是肉飛眉舞，有似冤屈者，則為是歯切腕攘。今吾輩実有其人生，又不為賊。若有少義微屈，則其動人，応百倍於彼矣。而半生所為，蠢蠢何事。未知蓋棺後有能動人者耶。不能不為此歎然也。翁亦与余同小説之嗜。毎掩巻，未必無此歎也。臨返録巻末問之。
　文政戊子春尽日　　秋嵒傑史龍題。
(14)　大庭脩　関西大学東西学術研究所資料集刊７『舶載書目』　1972。なお以下の議論に出てくる年代の関係については〔附表〕を参照されたい。
(15)　大庭脩　日中文化交流史叢書１『歴史』　第三章　近世　清時代の日中文化交流　1995　大修館書店　254-312頁
(16)　『羇旅漫録』三巻　『日本随筆大成』第一期第一巻　1975　吉川弘文館　190-195頁
(17)　同注（16）
(18)　殿村篠斎の略歴は，柴田光彦　馬琴と日記と書簡（二）　1973　『馬琴日記』「月報」2　中央公論社　6頁を参照した。

(19)　後藤丹治　日本古典文学大系60『椿説弓張月』解説　1958　岩波書店　10頁
(20)　木村三四吾　西荘文庫の馬琴書簡（四）　1957　ビブリアNo. 9　71-75頁
(21)　曲亭書簡集　『日本芸林叢書』第９巻　1929　六合館　39頁
(22)　曲亭書簡集拾遺　『日本芸林叢書』第９巻　1929　六合館　７頁
(23)　同注（19）　58-59頁
(24)　同注（20）　23-27頁
(25)　早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇第三十一巻『馬琴評答集』（五）　1991　早稲田大学出版社。文字の判読については注（５）鳥居論文に拠る。
(26)　善本写真集二十一『曲亭馬琴』　一五「水滸後伝」　1963　天理図書館
(27)　筑波本の書き入れは注（３）大塚論文掲載の書影による。また天理本の書き入れは東京大学東洋文化研究所でつくられた天理本の複製本で確認した。
(28)　同注（25）。この一文にもっともはやく言及したのは白木直也　諸本研究の立場より見たる滝沢馬琴の水滸観－水滸後伝との再会を契機に－　1972　鳥居久靖先生華甲記念論集　中国の言語と文学297-323頁である。
(29)　小石元俊，元瑞の生涯については以下すべて注（12）所掲山本著作および松尾論文による。

参考文献

注には出さなかったが，以下の文献も参考とした。
鳥居久靖訳　『水滸後伝』１－３巻　各巻解説　1966　平凡社　東洋文庫58・66・78
白木直也　諸本研究の立場より見たる滝沢馬琴の水滸観－水滸画伝校定原本を中心として－　1969　日本中国学会報第21集　250-264頁

附　　表

備考	年号	滝沢馬琴	殿村篠斎	小石元俊	小石元瑞
陳本原刊本	康熙三1664				
陳本舶載	元禄十六1703				
	寛保三1743			生	
1754東洋観臓	明和四1767	生			
蔡本刊	乾隆三五1770				
1771東門観臓	天明四1784				生
1798東海観臓	享和二1802	名古屋で蔡本目睹		1798解剖都督	執刀15歳
	文化二1805	水滸画伝		文化五没	
	文政九1826		大阪陳本購入		
	文政十一1828		この間補修		「識語」
	文政十三1830 ３月	蔡本購入			
	７月	陳本借り・校訂	陳本貸し		
	天保二1831	返本・国字評贈	返本着・国字評		

■ 戻る ■